

◁1998年度会長挨拶▷

平成10年度
日本放射光学会の基本方針日本放射光学会会長
上坪 宏道

新年明けましておめでとうございます。私が会長をお引き受けしてからはや1年が過ぎました。この一年間は我が国の放射光研究が新しい発展に向けて進み始めた記念すべき年であり、本学会でも次々に意義深い行事がありました。平成10年期における本学会の活動の基本方針は、新しい時代に向けて本学会の果たす役割を強化するように努めることと考えています。

この一年間に HISOR, SPring-8 やグレードアップした Photon Factory が相次いで稼働し始めましたが、これによって我が国は世界で最も充実した放射光施設群を持つようになり、放射光利用研究の選択肢が大幅に広がりました。近年の深刻な国家財政事情の中で、放射光研究の分野がこのような厚遇を受けたことは、長年にわたって関係研究者があげてきた研究成果による面が大きいと思いますが、21世紀における科学技術の新しい展開に果たす放射光の役割に対して、社会の期待が大きいことを示しています。私たちはその期待に応え、これらの放射光施設を用いて、学問のブレークスルーを作る研究や新しい技術開発を次々に生み出す責務があります。このような状況に於いて日本放射光学会が果たすべき最も重要な使命は、放射光科学研究の進展に対するソフト面での研究環境の整備、すなわち研究者間の情報交換、共同研究や交流を促進する場を構築するとともに、研究者の養成や社会の理解を得るための環境を作るために、中心的役割を果たすことであろうと思います。今年の本学会の基本方針はこれまで学会が進めてきた活動をさらに発展させることと思います。

昨年創設された若手研究者奨励賞の第一回受賞者が決まり、第10回年回・合同シンポで3名の方に授与されました。このような事業は学会として最も重要な事業の一つですが、今後ますます充実させねばならないと思っています。

8月に姫路で開催された「第6回放射光装置国際会議」では本学会も主催者の一員になりましたが、この会議の主催に対して初めて科学研究費補助金を得ることができ、実質的にも主催者としての役割を果たすことができました。この国際会議は参加者総数が600名を越え、海外からの参加者も200名を越すなど、我が国で開催される学問的な国際会議ではかなり大型のものになりましたが、その直後に開かれた「放射光に関するアジアフォーラム」とともに、本学会が本格的な国際会議を主催するにふさわしい学会に成長してきたことを内外に示しました。今後、財政基盤を強化させながら、放射光関連の国際会議や国際シンポジウム、ワークショップを開催するよう努力することが望まれます。

学会にとって最も重要な行事は年会の開催です。これまではPF、物性研や分子研など放射光共同利用施設の主催する合同シンポジウムと併催する形で年会が行われてきました。このことは誕生直後の本学会の発展にとって大きな支えになってきました。しかし、我が国でも新たにいくつかの放射光施設が稼働し、それ

ぞれが利用研究を活発に行いその成果を競い合うようになると、全国的で横断的な放射光学会年会が共通の研究発表の場として重要になってきます。本学会が年会を充実させ、年会における研究発表が研究者にとって重要な研究活動になるように努めることが、我が国における放射光科学の発展に対する本学会の重要な責務であると考えています。

本学会はその活動がますます重要になる時期に来ていますが、財政的基盤はまだ脆弱です。その強化を目指すことが今期の私たちの最大の課題です。そのためにはまず第一に会員を増やすことが必要で、現在の正(学生)会員数1000名を当面1500人にすることを目標にして会員増加に努めたいと思っています。各施設の利用者懇談会には本学会会員数を越える研究者が参加していますので、学会の会員であることの意義をもっと認識してもらうような学会活動を強化することが必要ですが、年会の充実強化がその重要な方策と考えています。また、賛助会員も増やす努力を継続するつもりですが、それと同時に会員数を増やすためには会員各位の協力が不可欠です。

以上述べたことを行うには一年の期間はあまりに短すぎますが、私たちは会員各位の賛同と協力を得て、本学会の新しい発展に向けて一歩でも進むことができると願っています。